

横須賀日日新聞 第48号
2016年3月6日
あなたが地域の主人公 11
テーマ：一灯照隅（東日本大震災から5年。今一度、できることを）

※許可を得て掲載しています。

あなたが地域の主人公 11

東日本大震災3・11から5年がたつ。あの日午後3時近く、サポートセンターの天井が大きくゆっくりと揺れる中で、これは遠くて大きいなと感じ、不安な気持ちになったことを思い出す。

一灯照隅

センターで休憩するよう呼び掛けた。50人ほどが体を休めた。結局、電車は動かず、サポートセンターはそのまま帰宅困難者の受け入れ場所となった。電話がつかず、パソコンでメールを送る人、インターネットを流し入れてくれた。超えた。近隣の方が毛布を差し入れてくれた。疲れ果て、敷いた段ボールの上に横になる人、たまに翌日に開催予定だったイベント用のお茶とお菓子で空腹を紛らす人。夜中の2時過ぎによく車

今一度、できることを

の映像に見入る人、皆不安そうで寡黙だった。FMブルー湘南が何度か帰宅困難者受け入れ場所としてサポートセンターを紹介したので、東京・横浜方面から歩いてきた方々が加わり、真夜中に100人を割は、阪神淡路大震災などそれまでの震災と全く様相が違っていった。被災地が広域で、行けばガソリンなど現地の物資を消費し、迷惑

をかけることになると思ってもあった。そして福島原発事故はボランティアの足を鈍らせた。活動を自己完結できる自衛隊が、その多くの役割を担った。震災に際してはなかなか動けないでいるわれわれに、県立保健福祉大学の阿部志郎先生は「横須賀から何かできることはないですか」と、まず考えること、行動することを促された。4月23日、県立保健福祉大学で緊急報告会「今、私たちにできること」を開催した。自らの伝手と責任で支援活動を始めた横須賀のグループが、少数だがおり、その報告会を行った。基調講演で阿部先生が最後に語られた言葉は「一灯照隅」。一人の掲げる灯りが片隅を照らし、その光が仲間を呼んで世界を照らす光となる。横須賀に小さな灯りを掲げる人が少しずつ増える機会となればと願った。あの日から5年を迎える。5年で打ち切られる支援体制も多くあると聞く。今一度「私たちにできること」を考えていきたい。（横須賀市立市民活動サポートセンター館長・高橋 亮）



基調講演で「一灯照隅」を語る阿部志郎さん＝県立保健福祉大学